

2024年2月25日（大斎節第2主日、B年）

牧師メッセージ

「前ではなく、後ろへ」

（マルコによる福音書8:31-38）

司祭ヨセフ太田信三

今日は、しばしば「受難告知」と呼ばれる箇所から始まります。しかし、イエスが語ったことは受難のことだけではありませんでした。「3日の後に復活することになっている。」と、復活の希望も語っているのです。しかし、この箇所は「受難と復活予告」とは呼ばれないのです。なぜでしょうか。わたしがこのことから感じるのは、人間は「復活」などといことよりも、確実なこととして知っている「死」にばかり気を取られてしまうものなのだ、ということです。ペトロはまさにそうだったのだと思います。事実、ペトロは復活ではなく、十字架上でのご受難にばかり気を取られています。ペトロはイエスを脇へと連れていき、「いさめ始めた」とあります。この「いさめる」という単語は、イエスがこのあとペトロを「叱った」という単語と同じです。ですから、ペトロはイエスを叱りつけた、というのが実際のところなのです。ペトロがなぜそのようなことをしたかという、自分の師匠であり、救い主であるイエスが十字架なんかで死なれては堪らないからです。自分が信じた救い主は、もっと強くあってもらわないと困る！ということです。不遜なのはペトロだけではありません。弟子の中には、イエスが王座に就いたなら自分を両脇に、他の弟子たちよりも偉くして欲しい、などと頼み込む兄弟もいたことを忘れてはなりません。ペトロもこの二人の兄弟も、結局はイエスを自分のために利用したい、自分の思いや願いの中に収めておきたいのです。

しかし今度はイエスが叱る番です。

「サタン、引き下がれ。あなたは神のことを思わず、人間のことを思っている。」強烈な言葉です。けれども、これはとても深い愛の言葉なのです。「引き下がれ」というのは「わたしの後ろだ」という意味の力強い言葉だからです。自分の思いや願いを優先させる。誰かより偉くなりたい。自分を肯定するため、自分の思いを叶えるため、神をもコントロールしようとする。自分の理解できる範囲に神を収めようとする。そういう思いが勝って、イエスの前にだって出てしまう。これこそ、ペトロや弟子たちの姿であり、また実際のわたしたちの姿だと言えるでしょう。しかしそこに留まっていたら、復活を通して示される、実現するまことの救いに与ることはできません。そうなれば人はさらに神から離れ、相変わらず死に囚われ、復活の希望に心が向かぬまま闇から闇へと進んでしまいます。だからこそイエスは、「わたしの後ろだ」と命じるのです。イエスの後ろにいればこそ、十字架と復活を通して実現する希望へ、死の闇ではなく復活の希望へと導かれるからです。

大斎節にあって、自分の立ち位置を確認しましょう。イエスの前ではなく、イエスが招くイエスの後ろへ。わたしたちの視線の先にいつでもイエスの背中がありますように。